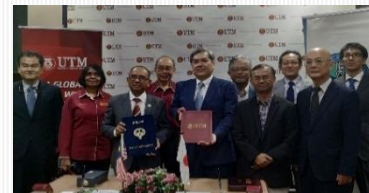


LAYANG LAYANG

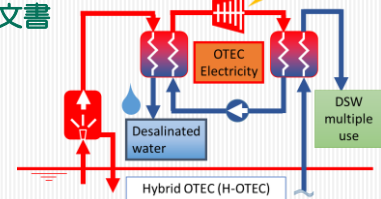
6-7月の出来事

革新的な海洋温度差発電 (H-OTEC) の開発プロジェクト開始

7月2日、マレーシア工科大学クアラルンプールキャンパスにおいて、海洋の表層と深層の温度差を利用した発電と、海洋深層水の淡水化による様々な商品の開発による地域経済の活性化を同時に行う、ハイブリッドモデルの実用化を図るプロジェクトの枠組みに関する合意文書の取交しが行われました。プロジェクトでは、ヌグリスビラン州ポートディクソンの海上に研究施設を設置する計画もあり、マレーシア初のハイブリッドモデルの構築という研究の今後が期待されます。



UTM副学長と佐賀大学副学長の署名した合意文書



SATREPS 「マレーシアにおける革新的な海洋温度差発電 (OTEC) の開発による低炭素社会のための持続可能なエネルギーシステムの構築」
 期間 2019年3月~2024年3月 馬側機関: マレーシア工科大学、マレーシアブトラ大学、マレーシア国民大学、マラヤ大学 日本側機関: 佐賀大学

漁業資源保全と地域結束強化につながる定置網漁業、漁村活性化

7月24日、スランゴール州クアラスランゴール市スンガイスンビラン地区にて、定置網を使った漁による漁村活性化モデル構築に向けたプロジェクトのキックオフミーティングが行われました。プロジェクトの現場では約5年前にこの地区へ試験導入した定置網を用い、網目に掛からない稚魚だけでなく、常夏の国ならではの産卵期の卵を持ったような魚も海に逃がしながら、複数の漁師が協力して漁をする様子も見られました。プロジェクトでは、このように資源保全に貢献し、協力しつつ漁をする定置網漁や付加価値のある水産加工品づくりを推進し、漁村を活性化する支援を行います。



協力しながらの定置網の網揚げ

草の根技術協力事業「マレーシアにおける漁業活性化モデルの構築と推進」

期間: 2019年10月~2023年9月 馬側機関: 農業・農業関連産業省漁業局、スンガイスンビラン地区住民組織 日本側機関: 鹿児島大学

東マレーシアの生物多様性保全を住民の手で

7月1日、サバ州キナバタンガン郡バトゥプティ村において住民組織の能力強化を通じた生態系サービスの維持・利用に向けたプロジェクトのキックオフミーティングが行われました。

バトゥプティ村を流れるキナバタンガン川河畔はオイルパーム植林の広がる東マレーシアの中でボルネオ象、オランウータンやテングザル等に代表される貴重な生物多様性が残された地域です。村では住民がエコツーリズム協同組合 (KOPEL) を作り、生計の向上を図るとともに生物多様性の保全のための教育活動も行っています。本プロジェクトでは北海道で生態系保全に取り組む Envision が環境教育の教材やプログラム作りを支援します。



オイルパームから在来種の河畔林へ転換する植林事業

草の根技術協力事業「生態系サービス維持向上に向けたESD活動基盤づくり」 期間: 2019年5月~2021年4月
 馬側機関: バトゥプティ村エコツーリズム協同組合 (KOPEL) 日本側機関: 特定非営利活動法人En Vision環境保全事務所

JICA海外協力隊がマラッカの小学校でワークショップ開催

7月16日、マレーシアに派遣されている環境保全分野のJICA海外協力隊で構成する「環境分科会」が、マラッカの小学校2校で高倉式コンポストの仕組みについて実際のコンポストを触りながら理解したり、固形廃棄物が自然に還るまでの年数をクイズ形式で学んだり、風呂敷包みを応用したトドン（ムスリムの女性が被るスカーフ）を利用したエコバックの作り方等を紹介するワークショップを開催しました。

午前には小学校4年生約90名、午後には小学校3～6年生の約200名が楽しみながら身近にできる環境保全について学びました。生徒たちは家から持ち寄ったトドンを使ったリュックサックや手提げづくりに熱中したり、ごみが自然に還るまでの年数をクラスメイトと一緒に考えて積極的に回答していました。当日は、協力隊が日頃コンポストの普及活動をしている女子中等学校の生徒も講師として参加し、しっかりと小学生にコンポストの仕組みについて説明するいつもとは違う一面が見られました。参加した生徒が家や地域で学んだ知識を伝えていき、環境に対する考えが少しでも変化する事を願っています。

青年海外協力隊（JOCV）サバ州公園局、SWCorp（ジョホール、マラッカ、ネグリスンピラン）、MRA（NGO）



皆真剣にクイズに参加！



お気に入りの作品を背負ったままコンポストの説明を聞く



中学生からの講義に熱心に耳を傾ける

ロボット・革新技术による下水道管路維持 セミナー

7月24日、最新の日本の下水道管渠の維持管理方法を紹介するセミナーをクアラルンプール市内の下水道処理公社の研修センターにて開催しました。このセミナーでは、小型・軽量・低価格の㈱北菱製のロボットのデモンストレーションも行われました。欧州製の類似製品の価格よりはるかに低価格のロボットに、参加者の方々は興味を持ち、デモンストレーションを見、説明を聞いていました。マレーシアでの下水道の管路延長、老朽化や混入した遺物や木の根による損傷した管路の補修に活用される日が来ることも期待したいです。

中小企業海外展開支援事業「下水道維持管理ロボットによる下水道管路の維持管理案件化調査」 期間：2019年2月～2020年5月
日本側機関：株式会社 北菱



下水道維持管理ロボット
【提供】北菱

マレーシア教育省、日本の基礎教育システムへの理解を深める

5月19-25日、日本の学校のシステムや管理についてマレーシア側の理解を深めるため、JICAはマレーシアの教育省及び経済省から、合計10名の行政官の方々を日本に招へいしました。この招へいは、日本式の道德観や価値観をマレーシアの児童・生徒に根付かせたいというマハティール首相の期待を受けて計画されたものです。日本滞在中、一行は日本の政策決定者や教育分野の専門家との面談や、幼稚園、小学校、中学校等への視察を行い、日本の学校における特別活動（特活）に関する知見を深めました。マレーシアでの日本式教育の普及に関する話題、今後も注目されます。



教育省のアミン局長ら10名

トピックス

1950年代の援助は民間から！？

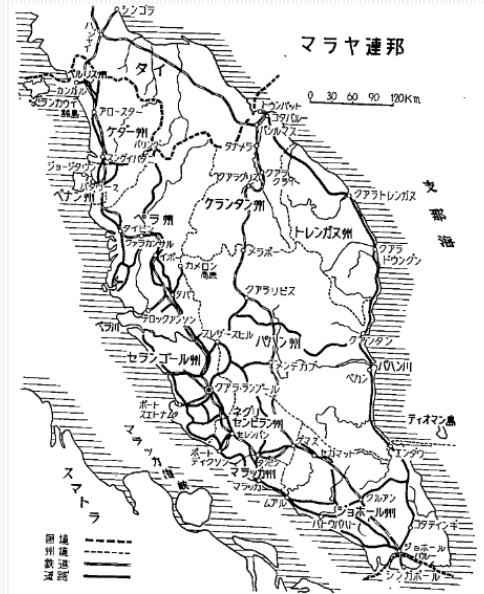
1956年、日本政府はマレーシアへの援助を開始した。同年10月に2名の研修員が日本で漁業の研修に参加したことから始まる。この実施を日本で担ったアジア協会は、民間組織だった*。当時はまだアジアの人たちに戦争の記憶も残っていた時代だ。日本政府が直接、援助を実施するのは相手国に脅威を与えるのではと配慮して、民間組織を設立したと言われている。

この時代には、日本の民間企業の開発途上国への進出の支援と、開発途上国の開発を目的として人材育成を行う技術協力が混在して実施されていた。1958年にマレーシアのペナンで開始された漁業プロジェクトは、まさに前者で、まぐろなどをとって、缶詰にしてマレーシアから流通させようというものだった。

当時は、日本に対する国際社会の信頼がじゅうぶんになかった。援助の実施にも様々な困難があったし、すべてが成功したというわけでもなかった。しかし、結果の如何にかかわらず、その過程で真摯に途上国の課題に向き合ったことは確かだ。アジア協会設立の際にも、この基本姿勢は繰り返し述べられている。

当たり前にあるものが、実は先人が築き上げてきたものだということに気づくことはあまりない。目に見えない日本に対する信頼など、更に難しい。マレーシアに援助を開始した時代と今を比べてみると、今、私たち日本人が当たり前のように享受している信頼とは、こういった積み重ねが地面を作っていて、その上に我々は立たせて頂いていることに気づく。

* アジア協会は統合を経て、後にJICAとなります。現在のJICAは日本政府の援助を実施する独立行政法人です。（文責：中澤繁樹）



1957年独立当時のマラヤ連邦



漁業研修に参加した帰国研修員のフォローでの水産物卸売市場調査



同フォローアップでの調査（水揚げ風景）

JICAマレーシア及びニュースレターのバックナンバーはこちら→ <http://www.jica.go.jp/malaysia/index.html>

JICAホームページはこちらから→ <http://www.jica.go.jp>

配信(追加、停止等)に関するご希望、ご意見、ご要望など → ms_oso_rep@jica.go.jp

JICA Malaysia Office

Level 29, Menara Citibank, 165 Jalan Ampang 50450 Kuala Lumpur Malaysia

Tel: 603-2166 8900 Fax:603-2166 5900 E mail address : ms_oso_rep@jica.go.jp